

「捨てられた親石」

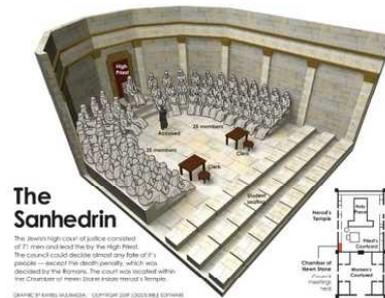
(マルコ12:1-12/マタイ21:33-46/ルカ20:9-18)

挽地 茂男

2019. 1. 20 日本基督教団千歳丘教会礼拝

※マルコの本文は最終頁にあります

教会の暦に従ってクリスマスに関連してお話をしてきましたのでしばらくマルコによる福音書を離れておりましたが、再びマルコ福音書に戻りたいと思います。今日は第2論争物語集(11:27-12:37)に収められている6つの論争のうち2番目の論争、第2論争を学びます。この物語の論争相手は直前(11:27-33)の第1論争に引き続き、サンヘドリン(最高法院)の重鎮たちです。つまり、第1論争で主イエスに「ヨハネの洗礼は天からのものか、人からのものか」と問われて、ヨハネを天からの、神が遣わした預言者だと思っていた群衆の反応を怖れて、「分からない」と答えた祭司長、律法学者、長老たち(宗教指導者たち/サン



ヘドリンの議員たち)です。彼らは主イエスの質問に対して「分からない」と答えた後、沈黙してしまっただけです。沈黙している彼らに、主イエスは追い打ちをかけるように、今日の譬え話を語ったのでした。ですから第1論争と第2論争は一続きの物語なのです。

この譬え話はきわめて寓意的です。寓意的な物語つまり寓話というのは、物語に登場する人物が誰を指しているのか。あるいは何を指しているのか、対応関係がはっきりしているのです。そのような寓話の代表



はやはり『イソップ寓話(童話)』です。皆さんもいくつかご存じでしょう。例えば、「アリとキリギリス」というお話をご存じでしょう。

夏の間、アリたちは冬の食料を蓄えるために働き続け、キリギリスはバイオリンを弾き、歌を歌って過ごします。やがて冬が来て、

キリギリスは食べ物を探しますが見つからず、最後にアリたちに頼んで、食べ物を分けてもらおうとしますが、アリは「夏には歌っていたんだから、冬には踊ったらどうだい?」と食べ物を分けることを拒否し、キリギリスは飢え死んでしまいます。

これがオリジナルの『イソップ寓話(童話)』です。しかし結末が余りに残酷なので、アリが慈悲心(哀れみの心)をもって食べ物を分けてあげるという改変が古くか



らなされてきました。この改変で現代もっともよく知ら

れた作品は、1934年にウォルト・ディズニーがシリー・シンフォニー・シリーズ〔Silly Symphony、75篇の短編アニメーションからなるシリーズ。アリとキリギリスは第42作〕の一作品として制作した短編映画があります。この作品では、当時ニューディール政策により社会保障制度の導入を進めていたフランクリン・ルーズベルト政権への政治的配慮から、アリが食べ物を分けてあげる代わりにキリ

ギリスがバイオリンを演奏するという結末に改変されています。

しかし先にお話ししましたお話が、オリジナルなのです。アリは働き者を指し、キリギリスは怠け者を指しています。やがて、困難な時代〔昆虫で言うと食料がほしくても手に入らない季節〕がやって来ます。将来に備えて一生懸命働いていた働き者(アリ)は困りませんが、備えを怠った怠け者(キリギリス)は自分の身を滅ぼしてしまいます。というお話です。実に対応関係がはっきりしています。そして語られている内容は実に道徳的な内容です。

主イエスの語られた「ぶどう園と農夫の譬え」も対応関係がはっきりしています。確認します。

- ① ぶどう園 イスラエル(の民)
- ② ぶどう園の主人 神
- ③ 農夫 イスラエルの宗教指導者
- ④ 僕 預言者たち
- ⑤ 愛する息子 主イエス



この対応関係を頭に置いて、譬えの部分につきり1-8節に、もう一度、目を通しておきます。



12:1 イエスは、たとえで彼らに話し始められた。「ある人がぶどう園を作り、垣を巡らし、搾り場を掘り、見張りのやぐらを立て、これを農夫たちに貸して旅に出た。

12:2 収穫の時になったので、ぶどう園の収穫を受け取るために、僕を農夫たちのところへ送った。

12:3 だが、農夫たちは、この僕



を捕まえて袋だたきにし、何も持たせないで帰した。12:4 そこでまた、他の僕を送ったが、農夫たちはその頭を殴り、侮辱した。12:5 更に、もう一人を送ったが、今度は殺した。そのほかに多くの僕を送ったが、ある者は殴られ、ある者は殺された。12

:6 まだ一人、愛する息子がいた。『わたしの息子なら敬ってくれるだろう』と言って、最後に息子を送った。12:7 農夫たちは話し合った。『これは跡取りだ。さあ、殺してしまおう。そうすれば、相続財産は我々のものになる。』12:8 そして、息子をつまえて殺し、ぶどう園の外にほうり出してしまった。

実は、この譬えは旧約聖書のある箇所が下敷きになっています。イザヤ書5章1-7節です。イザヤ書の寓意の対応関係も非常に明快です。

①ぶどう園 イスラエル(の民)、ユダの人々

②わたし〔預言者イザヤ〕の愛する者(ぶどう園の主人)神

〔3節から、わたし=神、神の思いを自分の思いとする預言者イザヤの言葉は、神の言葉と境目がなくなってしまう。〕

イザヤ書とマルコによる福音書を比較してみると、4つの共通する要素が存在します。最初に4つの要素を列挙しておきます。(1)神の選び、と(2)神の準備、と(3)神の不満、と(4)神の処分です。

さて、1つ目の要素は(1)神の

選びです。預言者イザヤは、その預言の前半で、自分(わたし)の愛する者つまり神が、自分のぶどう畑つまりイスラエル(の民)をどれほど愛しているか——つまり神の選び——を愛の歌 (love song) として歌い上げま



す。イザヤ書 5 章 1 節。「5:1 わたしは歌おう、わたしの愛する者のために / そのぶどう畑の愛の歌を。わたしの愛する者は、肥沃な丘に / ぶどう畑を持っていた。」それに対してマルコ

は、神の選びの要素を、短く表現します。12章1節b(中盤)「ある人 [=神] がぶどう園を作り…。」イスラエルの民を1つの民として選んだのは神なのです。イスラエルの存在は神にかかっています。

第2の要素は、(2) 神の準備。ぶどう園の主人つまり神が行った諸準備について語ります。イザヤ書 5 章 2 節 a。わたしの愛する者は「5:2 よく耕して石を除き、良いぶどうを植えた。その真ん中に見張りの塔を立て、酒ぶねを掘り / 良いぶどうが実るのを待った。」

神はイスラエルを丹念に思いを込めて育てて、実りを待ちます。マルコでも同様に、ぶどう園の主人(神)は、12章1節c(後半)「垣を巡らし、搾り場を掘り、見張りのやぐらを立て、これを農夫たちに貸して旅に出た。」主人は準備を万端整えると、農夫たちに貸して旅に出ます。ぶどう園を所有するどちらの〔イザヤ書とマルコ福音書の〕主人たちも、あとは収穫を待つばかりです。

しかし結果は、ぶどう園の主人(神)の期待を裏切ります。第3は、(3) 神の不満です。期待に反するぶどう園の状態を見た、主人(神)の不満が語られます。イザヤ書 5 章 2 節 b。

「しかし、実ったのは酸っぱいぶどうであった。」これに対してマルコは、主人の意に反する農夫たちの横領と暴挙について語ります。12章2-8節。主人は、「12:2 収穫の時になったので、ぶどう園の収穫を受け取るために、僕を農夫たちのところへ送った。12:3 だが、農夫たちは、この僕を捕まえて袋だたきにし、何も持たせないで帰した。12:4 そこで



また、他の僕を送ったが、農夫たちはその頭を殴り、侮辱した。12:5 更に、もう一人を送ったが、今度は殺した。そのほかに多くの僕を送ったが、ある者は殴られ、ある者は殺された。12:6 まだ一人、愛する息子がいた。『わたしの息子なら敬ってくれるだろう』と言って、最後に息子を送った。12:7 農夫たちは話し合った。『これは跡取りだ。さあ、殺してしまおう。そうすれば、相続財産は我々のものになる。』12:8 そして、息子をつまえて殺し、ぶどう園の外にほうり出してしまった。」ぶどう園の主人(神)は、ぶどう園の収穫を受け取るために、何度も僕を送りますが、農夫たちは僕に暴力を振るい、彼らを辱め、ある者を殺してしまいます。主人は最後には愛する一人息子を送りますが、農夫たちはその息子を殺してしまいます。ここにイザヤ書にはないマルコ福音書の特徴が出てきます。すなわち僕たちと主人の息子を殺す農夫たちです。つまりマルコの主イエスは「預言者



と御子をも殺す都エルサレム」を糾弾しているのです。

そして第4は、(4)神の処分です。ぶどう園(と農夫)に対する神の処分です。イザヤ書では、その結果に失望した神は、まず、預言者を通してイスラエルの人々に訴えたえます。3-4節。〔ここからの〈わたし〉は〈神〉をさす。おそらく預言者は自分のことのように、神のことを考えているので、このような交替が平気で起こっているのです。預言者にとって、神のことは自分のことなのです。〕さて神の訴えです。「5:3 さあ、エルサレムに住む人、ユダの人よ／わたしとわたしのぶどう畑の間を裁いてみよ〔「裁いてみよ」というのは「白黒、判断をつけよ」という意味です〕。5:4わたしがぶどう畑のためになすべきことで／何か、しなかったことがまだあるというのか。わたしは良いぶどうが実るのを待ったのに／なぜ、酸っぱいぶどうが実ったのか。」そしてこの失望はイスラエルに対する処分(審き)に転じます。5-6節。

「5:5 さあ、お前たちに告げよう／わたしがこのぶどう畑をどうするか。囲いを取り払い、焼かれる

にまかせ／石垣を崩し、踏み荒らされるにまかせ 5:6 わたしはこれを見捨てる。枝は刈り込まれず／耕されることもなく／茨やおどろが生い茂るであろう。雨を降らせるな、とわたしは雲に命じる。」神は、イスラエルの荒廃と滅亡を宣言します。そして最後に、預言者イザヤ自身が、寓意の意味／対応関係を明らかにして、謎解きをします。7節。

5:7 イスラエルの家は万軍の主のぶどう畑／主が楽しんで植えられたのはユダの人々。主は裁き（ミシュパト）〔「裁き」は正確な倫理的に正しい判断〕を待っておられたのに／見よ、流血（ミスパハ）。正義（ツェダカ）を待っておられたのに／見よ、叫喚（ツェアカ）。」語呂合わせをしながら、印象深くイスラエルに対する、神の（そして預言者の）失望を語ります。

マルコ福音書の主イエスも、譬えを語った後、イスラエルとその指導層の荒廃と滅亡を暗示して、サンヘドリンの重鎮たちに向かって、こう質問します。12章9節。「12:9 さて、このぶどう園の主人は、どうするだろうか。戻って来て農夫たちを殺し、ぶどう園を

ほかの人たちに与えるにちがいない。」マルコは、ぶどう園（イスラエル）の処分に加えて、農夫たち（イスラエルの宗教指導者）の処分についても語っています。ぶどう園（イスラエル）を「ほかの人たちに与える」つまり他国による占領——ローマ軍のエルサレム占領〔ユダヤ戦争 66-70A.D.〕を暗示している——即ちイスラエルの国家としての滅亡が語られます。国家の滅亡の時は、同時に指導者の滅亡の時でもあるのです。



F・アイエツ『エルサレム神殿の破壊』

今見ましたように、マルコ福音書の主イエスの譬えは、イザヤ書を見取り図として、「酸っぱいぶどう」のテーマ、すなわち「神のぶどう園が主人である神の期待を裏切った」というテーマを、預言者を拒絶し「預言者を殺す都エルサレム」というテーマとして発展させているのです。預言者の言葉

つまり神の言葉を拒絶した都に、滅亡が語られます。

マタイによる福音書 23章 37 – 39 節を見ると、すでにエルサレムに向かう途上で、主イエスは、このエルサレムによる預言者殺しを厳しく糾弾しています。

マタ 23:37 「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった。23:38 見よ、お前たちの家は見捨てられて荒れ果てる。23:39 言うておくが、お前たちは、『主の名によって来られる方〔神の預言者／神の子イエス〕に、祝福があるように』と言うときまで、今から後、決してわたしを見ることがない。」

このマタイの記事と並行するルカ福音書 13章 33 – 34 節〔ルカ 13:34はマタイ 23:37と同文〕を見ると、そのエルサレムに向かって行く主イエスの覚悟が語られています。ルカ 13章 33 – 34 節。ルカ 13:33 だが、わたしは今日も明日も、その次の日も自分の道を

進まねばならない。預言者がエルサレム以外の所で死ぬことは、ありえないからだ。13:34 「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった。

主イエスは、今、そのエルサレムに立っています。エルサレム神殿の境内でイスラエルの宗教指導者と向き合っているのです。神政政治を行っていた古代イスラエルにおいて、主イエスは今、イスラエルで最も政治的な場所に立っているのです。イスラエル神政政治の牙城エルサレム神殿で、譬えによってユダヤ人指導者たちの悪行（権威の乱用）を告発しているのです。主イエ



スはその譬えによって、指導者（祭司長、律法学者、長老）たちの行為を、殺人にまでいたる暴力的な自己中心的行為として描写しています。宗教的な現状を維持することによ

って、既得権益を持つ人たちが大規模な職権乱用をしていることを糾弾しているのです——その職権は本来神と人に仕えるために与えられているにもかかわらずです。

主イエスの質問は、ぶどう園の主人(神)の報復を語っています。それはイエラエルの滅亡(エルサレム陥落 70A.D.)の預言です。「ぶどう園の主人は…戻って来て農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるにちがいない」(9節)。ルカによる福音書は、このことを預言して主イエスが泣いたと伝えます。19章41-44節。ルカ19:41 エルサレムに近づき、都が見えたとき、イエスはその都のために泣いて、19:42 言われた。「もしこの日に、お前も平和への道をわきまえていたなら……。しかし今は、それがお前には見えない。19:43 やがて時が来て、敵が周りに堡壘を築き、お前を取り巻



ユダヤ戦争、戦利品とともにローマの将軍ティトスの凱旋

いて四方から攻め寄せ、19:44 お前とそこにいるお前の子らを地にたたきつけ、お前の中の石を残らず崩してしまうだろう。それは、神の訪れてくださる時をわきまえなかったからである。」

ぶどう園の主人の愛する息子は殺されます。主イエスも、イスラエルの宗教指導者たちによって殺されます。しかし救いの出来事の展開は「逆転」を用意していたのです。主イエスは旧約聖書を引用してこう語ります。12章10-12節。12:10 聖書にこう書いてあるのを読んだことがないのか。『家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった。12:11 これは、主がなさったことで、わたしたちの目には不思議に見える。』

これは詩編の118編22-23節の言葉です。少し前後の幅を取って引用します。19-26節。

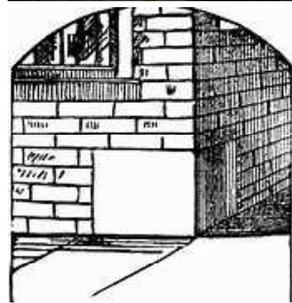
〔前略〕118:19 正義の城門を開け／わたしは入って主に感謝しよう。118:20 これは主の城門／主に従う人々はここに入る。118:21 わたしはあなたに感謝をささげる／あなたは答え、救いを与えてくださった。118:22 家を建てる

者の退けた石が／隅の親石となった。118:23 これは主の御業／わたしたちの目には驚くべきこと。

118:24 今日こそ主の御業の日。今日を喜び祝い、喜び躍ろう。

118:25 どうか主よ、わたしたちに救いを。どうか主よ、わたしたちに栄えを。118:26 祝福あれ、主の御名によって来る人に。わたしたちは主の家からあなたたちを祝福する。

この聖書引用(詩118:1-29)は、神が、「家を建てる者」すなわち宗教指導者たちをものともせず、彼らなしで事が成し遂げられる(勝利する)ことを断言しているのです。



なぜなら彼ら家を建てる専門家が捨てた石が建物を支える「隅の親石となった」からです。専門家は正しく石を選べていないのです。隅石(隅の親石)とは、

石造りや煉瓦造りなどの建物の壁の出隅〔壁などの2つの面が出合っている外側の角〕に積まれる石のことで、補強を目的としてやや大きめの石を用います。家を建

てる者(専門の建築家=宗教指導者たち)が捨てた石(イエス)が、主の家(神の国、教会)の礎石となるのです。同時にこの引用された詩編は、エルサレム入城のイメージをももっていて(19-20, 26節)、エルサレム入城以来の主イエスの活動が、結局は宗教指導者をもろともせず成し遂げられることを暗示しているのです。

さらに新約聖書では、この捨てられた石のイメージは、教会を建て上げるという文脈で(教会論的に)展開されます。キリストは生きた石、信徒も霊的な家を造る生きた石だとされます。わたしたちは先週、洗礼者ヨハネの「神はこんな石からでも、アブラハムの子たちを造り出すことができになる」(マタイ3:9)という言葉学びました。神はわたしたちを生かし、教会を建て上げるためにお持ちになるのです。

ペトロ手紙一2章4-8節a。

一ペト 2:4 この主のもとに来なさい。主は、人々からは見捨てられたのですが、神にとっては選ばれた、尊い、生きた石なのです。

2:5 あなたがた自身も生きた石として用いられ、霊的な家に造り上

げられるようにしなさい。そして聖なる祭司となって神に喜ばれる霊的ないけにえを、イエス・キリストを通して献げなさい。2:6 聖書にこう書いてあるからです。「見よ、わたしは、選ばれた尊いかなめ石を、／シオンに置く。これを



信じる者は、決して失望することはない。」 2:7 従

って、この石は、信じているあなたがたには掛けがえのないものですが、信じない者たちにとっては、／「家を建てる者の捨てた石、／これが隅の親石となった」のであり、 2:8 また、／「つまずきの石、／妨げの岩」なのです。彼らは御言葉を信じないのでつまずくのです。…

主イエスの譬えがイスラエルの宗教指導者たちへの当てつけであることは、明らかです。彼らは主



イエスを逮捕すべきだと考えました。しかし群衆を恐れて、そうできなかったのです。12節。

12:12 彼らは、イエスが自分たちに当てつけてこのたとえを話されたと感じたので、イエスを捕らえようとしたが、群衆を恐れた。それで、イエスをその場に残して立ち去った。宗教指導者たちは手出しをしませんでしたが、この後虎視眈々と、主イエスの捕縛の機会をうかがうことになるのです。

主イエスの譬えは、宗教指導者たちに対する当てつけ(当てこすり)でしたが、それは単に、自己満足のためではありませんでした。相手を沈黙に追い込んで自分の溜飲を下げたり、相手に不快感を与えることを目的としているのではないのです。この「当てつけ」には、主イエスの願いが込められています。神のぶどう園を耕し管理する神の僕として生きること、仕えられる者ではなく仕える者となること、真の権威とは、神と人ともに仕える権威であることを教えようとしているのです。

しかし「当てつけ」から宗教指導者たちに生じたものは、敵意でした。しかもその敵意は増大して、



主イエスを捕縛する意志を確固たるものとしたのです。しかし現時点では、彼らは、

群衆を恐れてそれを実行できませんでした。人を恐れること、それは神を畏れない人々の特徴です。彼らには計算がありました。群衆の立ち位置がイエス側に移るとき宗教権力者たちにとって、最大の危険がやってきます。反対に、群衆が権力者側に立ち位置を変えるときイエスへの危険が最大となるのを、彼らは知っていたのです。

権威は神さまによって与えられるものです。しかも権威が与えられるのは、神と人に仕えるためなのです。この神殿での論争の場面でも、主イエスの権威と、宗教指導者たちの権威の違いが歴然としています。そしてこの宗教指導者たちの権威によって、主イエスは捨てられようとしているのです。権威が、自己利益のために用いられるとき、いかに真実からかけ離れたものとなることかが分かります。しかし神さまの知恵は、人間の愚かさを超えていました。「家を建てる者の捨てた石、／これが

隅の親石となった」のです。わたしたちも神にとっての「生きた石」として、霊の家をたて上げる働きに参加して生きたいと思います。新しい一週歩みを、この主とともに歩み出しましょう。祈ります。

2019. 1. 20 日本基督教団千歳丘教会礼拝



12:1 イエスは、たとえで彼らに話し始められた。「ある人がぶどう園を作り、垣を巡らし、搾り場を掘り、見張りのやぐらを立て、これを農夫たちに貸して旅に出た。

12:2 収穫の時になったので、ぶどう園の収穫を受け取るために、僕を農夫たちのところへ送った。

12:3 だが、農夫たちは、この僕を捕まえて袋だたきにし、何も持たせないで帰した。

12:4 そこでまた、他の僕を送ったが、農夫たちはその頭を殴り、侮辱した。

12:5 更に、もう一人を送ったが、今度は殺した。そのほかに多くの僕を送ったが、ある者は殴られ、ある者は殺された。

12:6 まだ一人、愛する息子がいた。『わたしの息子なら敬ってくれるだろう』と言って、最後に息子を送った。

12:7 農夫たちは話し合った。『これは跡取りだ。さあ、殺してしまおう。そうすれば、相続財産は我々のものになる。』

12:8 そして、息子を捕まえて殺し、ぶどう園の外にほうり出してしまった。

12:9 さて、このぶどう園の主人は、どうするだろうか。戻って来て農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるにちがいない。

12:10 聖書にこう書いてあるのを読んだことがないのか。『家を建てる者の捨てた石、／これが隅の親石となった。』

12:11 これは、主がなさったことで、／わたしたちの目には不思議に見える。』

12:12 彼らは、イエスが自分たちに当てつけてこのたとえを話されたと気づいたので、イエスを捕らえようとしたが、群衆を恐れた。それで、イエスをその場に残して立ち去った。

12·1 Καὶ ἤρξατο αὐτοῖς ἐν παραβολαῖς λαλεῖν, Ἀμπελῶνα ἄνθρωπος ἐφύτευσεν καὶ περιέθηκεν φραγμὸν καὶ ὠρυξεν ὑπολήμιον καὶ ὠκοδόμησεν πύργον καὶ ἐξέδετο αὐτὸν γεωργοῖς καὶ ἀπεδήμησεν.

12·2 καὶ ἀπέστειλεν πρὸς τοὺς γεωργοὺς τῷ καιρῷ δούλον ἵνα παρὰ τῶν γεωργῶν λάβῃ ἀπὸ τῶν καρπῶν τοῦ ἀμπελῶνος·

12·3 καὶ λαβόντες αὐτὸν ἔδειραν καὶ ἀπέστειλαν κενόν.

12·4 καὶ πάλιν ἀπέστειλεν πρὸς αὐτοὺς ἄλλον δούλον· κάκεινον ἐκεφαλίωσαν καὶ ἠτίμασαν.

12·5 καὶ ἄλλον ἀπέστειλεν· κάκεινον ἀπέκτειναν, καὶ πολλοὺς ἄλλους, οὓς μὲν δέροντες, οὓς δὲ ἀποκτένοντες.

12·6 ἔτι ἓνα εἰυῖδὸν ἀγαπητόν· ἀπέστειλεν αὐτὸν ἔσχατον πρὸς αὐτοὺς λέγων ὅτι Ἐντραπήσονται τὸν υἱόν μου.

12·7 ἐκεῖνοι δὲ οἱ γεωργοὶ πρὸς ἑαυτοὺς εἶδον Οὗτός ἐστιν ὁ κληρονόμος· δεῦτε ἀποκτείνωμεν αὐτόν, καὶ ἡμῶν ἔσται ἡ κληρονομία.

12·8 καὶ λαβόντες ἀπέκτειναν αὐτόν καὶ ἐξέβαλον αὐτὸν ἔξω τοῦ ἀμπελῶνος.

12·9 τί (ου) ποιήσει ὁ κύριος τοῦ

ἀμπελῶνος; ἐλεύσεται καὶ ἀπολέσει τοὺς γεωργοὺς καὶ δώσει τὸν ἀμπελῶνα ἄλλοις.

12·10 οὐδὲ τὴν γραφὴν ταύτην ἀνέγνωτε, Λίθον ὃν ἀπεδοκίμασαν οἱ οἰκοδομοῦντες, οὗτος ἐγενήθη εἰς κεφαλὴν γωνίας·

12·11 παρὰ κυρίου ἐγένετο αὕτη καὶ ἔστιν θαυμαστὴ ἐν ὀφθαλμοῖς ἡμῶν;

12·12 Καὶ ἐζήτουν αὐτὸν κρατῆσαι, καὶ ἐφοβήθησαν τὸν ὄχλον, ἔγνωσαν γὰρ ὅτι πρὸς αὐτοὺς τὴν παραβολὴν εἰ. καὶ ἀφέντες αὐτὸν ἀπήλθον.